

「【総論】 総論関係」に係る検討

1. 基準の目的

○「中間とりまとめ」における記述

- ・他の地方公共団体と比較可能な標準的な財務書類の作成を進めて行くことが重要となる。
- ・地方公共団体全体としての財務情報の開示を行っていくためにも、資産評価の方法や様式など財務書類の作成の基本となる部分について、統一的な取扱いとして整理すべきである。

○課題・論点

- ・特になし。

○論点整理の考え方

- ・「中間とりまとめ」を踏まえた記載とする。

○基準案

- ・本基準は、今後、地方公会計の推進を図るために、その整備にあたっての標準的な基準を示すものである。
- ・本基準の設定によって、それぞれの地方公共団体において、財務書類の作成と開示及びその活用を行うことのみならず、他の地方公共団体との比較を容易とし、その財政構造の特徴や課題をより客観的に分析することで、住民等に対するわかりやすい説明、財政運営や行政評価等への活用を充実させることが可能となるものである。
- ・また、個々の地方公共団体のみならず、地方公共団体全体としての財務情報の開示を行っていくためにも、資産評価の方法や様式など財務書類の作成の基本となる部分について、統一的な取扱いとして整理することとする。
- ・また、本基準の設定は、例えば国と地方を併せた財務情報の開示等、今後、国と連携を図る上でも必要となるものである。
- ・なお、本基準の設定によって、各地方公共団体がそれぞれの創意と工夫により、住民等への説明責任や行政経営に資する財務書類を作成することを妨げるものではない。

○留意点

- ・他の検討項目を整理した上で、最終的に整理する。

2. 財務書類の報告主体

○「中間とりまとめ」における記述

- ・特になし。

○課題・論点

- ・特になし。

○論点整理の考え方

- ・現行を踏まえ、都道府県、市町村及び特別区とする。

○基準案

- ・本基準が対象とする報告主体は、都道府県、市町村及び特別区とする。

○留意点

- ・一部事務組合や広域連合、財産区は報告主体とするか。
- ・他の検討項目を整理した上で、最終的に整理する。

3. 財務書類の作成目的

○「中間とりまとめ」における記述

- ・個々の地方公共団体における地方公会計整備の意義としては、①住民や議会等に対し、財務情報をわかりやすく開示することによる説明責任の履行と、②資産・債務管理や予算編成、行政評価等に有効に活用することで、マネジメントを強化し、財政の効率化・適正化を図ることが挙げられる。
- ・また、地方公会計の整備は個々の地方公共団体だけでなく、地方公共団体全体としての財務情報のわかりやすい開示という観点からも必要があるものである。

○課題・論点

- ・特になし。

○論点整理の考え方

- ・「中間とりまとめ」を踏まえた記載とする。

○基準案

- ・地方公共団体において財務書類を作成する目的としては、住民や議会等に対し、財務情報をわかりやすく開示することによる説明責任の履行と、資産・債務管理や予算編成、行政評価等に有効に活用することで、マネジメントを強化し、財政の効率化・適正化を図ることにある。
- ・また、財務書類の作成は、個々の地方公共団体だけでなく、地方公共団体全体としての財務情報のわかりやすい開示という観点からも必要があるものである。

○留意点

- ・他の検討項目を整理した上で、最終的に整理する。

4. 財務書類の一般原則（質的特性）

○「中間とりまとめ」における記述

- ・新たな基準の設定にあたっては、現実問題として、地方公会計よりも企業会計の方が先行し、一般的に普及していること等を踏まえると、企業会計をベースにしながらも、税収等の地方公会計の固有の論点を考慮して整理することが適当である。

○課題・論点

- ・他の公会計基準では、企業会計原則を踏まえた会計処理の原則を記載しているが、同様に記載すべきか。

○論点整理の考え方

- ・地方公会計については、企業会計や地方独立行政法人会計等とは異なり、現金主義会計を補完するものとして整備するものであるため、現行どおり、会計処理の原則としての記載は必要ないものとする。
- ・ただし、説明責任を遂行し、意思決定に有用な情報を提供するという観点から、現行どおり質的特性は記載する。

○基準案

地方公共団体における財務書類の質的特性とは、財務書類を作成する目的を達成する上で、財務情報として具備すべき定性的な要件をいい、その内容に応じて、大きくは以下の4つに分類される。

1. 理解可能性

- ・地方公共団体の財務書類は、利用者が投資家など会計の専門知識を持った人々に限られず、一般の住民にも理解できるようなものでなければならぬため、できるだけ簡潔に分かりやすいものとしなければならない。

2. 目的適合性

- ・決算情報の開示と住民による財政規律という目的を達成する上で、財務書類がその利用者にとってどれだけ有用性があるかを意味する。目的適合性の有無を判断するためには、情報利用者が事後的に地方公共団体の財務情報を評価することに役立つか（事後的評価可能性）、情報利用者が地方公共団体の財政状態等について将来予測やシミュレーションを行うことに役立つか（予測・シミュレーション可能性）、財務書類が遅延なく適時に行われているか（適時性）という点等が考慮されるべきである。

3. 信頼性

- ・地方公共団体における財務書類の目的である決算情報の開示と住民による財政規律を達成する上で、その情報がどれだけ信頼に値する正確性と真実性を有するかを意味する。信頼性の有無を判断するためには、財務情報が取引事象の法律的形式よりもその実質と経済的実態を反映しているか（実質優先主義）、情報利用者の意思決定を歪めることはないか（中立性）、財務書類の表示が取引事象を忠実に反映するものとなっているか（表示の忠実性）という点等が考慮されるべきである。

4. その他の一般的特性

- ・企業会計の場合と同様、財務情報に省略または誤表示があれば情報利用者の意思決定に影響を及ぼすが、どの程度の省略または誤表示ならば許容し得るか（重要性）、財務情報が会計期間または他の会計主体との間で比較し得るものか（比較可能性）という点等が考慮されるべきである。

○留意点

- ・他の検討項目を整理した上で、最終的に整理する。

**【総論】財務書類の一般原則(質的特性)に係る参考資料
(質的特性に係る対比表)**

		基準モデル	国際会計基準
規定箇所		新地方公会計制度研究会報告書	第1号 財務諸表の表示
理解可能性		理解可能性の原則とは、地方公共団体の財務書類は、利用者が投資家など会計の専門知識を持った人々に限られず、一般の住民にも理解できるようなものでなければならぬため、できるだけ簡潔に分かりやすいものとしなければならない原則をいう。	利用者が、通常その意味を理解できると考えられる時、情報は理解可能となる。この目的上、利用者は、主体の活動と事業環境を良く知っており、その主体の情報を研究したいと望んでいるのが前提である。複雑な事柄についての情報は、一部の利用者が理解することが困難だという理由だけで財務諸表から除外すべきではない。
目的適合性		目的適合性の原則とは、決算情報の開示と住民による財政規律という目的を達成する上で、財務書類がその利用者にとってどれだけ有用性があるかを意味する。目的適合性の有無を判断するためには、①情報利用者が事後的に地方公共団体の財務情報を評価することに役立つか(事後的評価可能性)、②情報利用者が地方公共団体の財政状態等について将来予測やシミュレーションを行うことに役立つか(予測・シミュレーション可能性)、③財務書類が遅延なく適時に行われているか(適時性)という点等が考慮されるべきである。	情報は、利用者が、過去、現在若しくは将来の事象を評価し、又は利用者の過去の評価を確認し訂正するのに使われる可能性があるならば、その情報は利用者にとって目的適合性がある。目的適合性があるためには、情報は、適時性も兼ね備えなくてはならない。
信頼性		信頼性の原則とは、地方公共団体における財務書類の目的である決算情報の開示と住民による財政規律を達成する上で、その情報がどれだけ信頼に値する正確性と真実性を有するかを意味する。信頼性の有無を判断するためには、①財務情報が取引事象の法律的形式よりもその実質と経済的実態を反映しているか(実質優先主義)、②情報利用者の意思決定を歪めることはないか(中立性)、③財務書類の表示が取引事象を忠実に反映するものとなっているか(表示の忠実性)という点等が考慮されるべきである。	情報は、重大な誤謬及び偏向が除去され、またそれが表示しようとするか、あるいは表示されることが合理的に期待される事実を忠実に表現したもとのとして利用者が信頼する場合に、信頼性の特性を有する。
その他の一般的特性	重要性	その他の一般的特性としては、企業会計の場合と同様、①財務情報に省略または誤表示があれば情報利用者の意思決定に影響を及ぼすが、どの程度の省略または誤表示ならば許容し得るか(重要性)、②財務情報が会計期間または他の会計主体との間で比較し得るものか(比較可能性)という点等が考慮されるべきである。	情報の目的適合性は、その性質及び重要性によって影響を受ける。 情報は、その脱漏や虚偽表示が、財務諸表に基づいて利用者が行う意思決定又は査定に影響を与える場合は、重要性を有する。重要性は、脱漏や虚偽表示があった特定の状況下で判断される当該項目又は誤謬の性質と大きさに依存する。したがって、重要性は、情報が有用であるために有していなければならない主要な質的特徴の一つであるというよりは、入口又は境界線を示すものである。
	比較可能性		利用者が、財務諸表上のある情報と他の報告書上の情報との間の類似点や相違点を識別できる時は比較可能性がある。比較可能性は、次の事項に適用できる。 ・異なる主体間の財務諸表の比較、 ・同じ主体の多期間の財務諸表の比較 比較可能性の質的特徴の重要な意味は、利用者に対して、財務諸表の作成に当たって採用した会計方針、その方針の変更及びこれらの変更の影響を知らせることである。利用者は、主体の業績を各期ごとに比較したいと望むので、財務諸表は当期に対応する過年度の情報を示すことが重要である。
完全性		完全性の原則とは、地方公共団体の財務書類は、すべての財源とその用途に関する情報を含んでいなければならないという原則をいう。具体的には、ストック情報(ある一時点の財産残高)としてすべての経済資源を網羅すべきことはもちろん、フロー情報(一会計期間の取引高)としても、損益取引のみならず、純資産及びその内部構成を変動させる損益外のすべての取引(資本取引等)をも総額表示で網羅すべきことを意味する。完全性の原則は、地方公共団体の予算等の政策形成上の意思決定を住民の利益に合致させる上で、公会計において特に重要な質的特性である。	財務諸表における情報は、重要性と費用という制約の範囲内で完全であるべきである。

【総論】財務書類の一般原則(質的特性)に係る参考資料(一般原則に係る対比表)

	地方公営企業会計	地方独立行政法人会計	企業会計
規定箇所	地方公営企業が会計を整理するに当たりよるべき指針	地方独立行政法人会計基準及び地方独立行政法人会計基準注解	企業会計原則
真実性の原則	<ul style="list-style-type: none"> 地方公営企業は、その事業の財政状態及び経営成績に関して、真実な報告を提供しなければならない。 地方公営企業は地方公共団体の事務及び事業の実施主体として、その業務の実施に関して負担された経済資源に関する情報を負担主体である住民等に開示する責任を負っており、説明責任の観点から、その財政状態及び経営成績を明らかにし、適切に情報開示を行うことが要請される。このような説明責任の観点から、地方公営企業の会計は、その財政状態及び経営成績に関して、真実な報告を提供するものでなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 地方独立行政法人の会計は、地方独立行政法人の財政状態及び経営成績に関して、真実な報告を提供するものでなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 企業会計は、企業の財政状態及び経営成績に関して、真実な報告を提供するものでなければならない。
正規の簿記の原則	<ul style="list-style-type: none"> 地方公営企業は、その事業に関する取引について正規の簿記の原則に従って正確な会計帳簿を作成しなければならない。 地方公営企業においては、その財政状態及び経営成績に関する全ての取引及び事象について補足しうる合理的な会計処理及び記録の仕組みとして、複式簿記による会計帳簿は、地方公営企業の財政状態及び経営成績に関する全ての取引及び事象について、網羅的かつ検証可能な形で作成されなければならない。 地方公営企業の会計に関する書類は、正確な会計帳簿に基づき作成し、相互に整合性を有するものでなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 地方独立行政法人の会計は、地方独立行政法人の財政状態及び経営成績に関する全ての取引及び事象について、複式簿記により体系的に記録し、正確な会計帳簿を作成しなければならない。 会計帳簿は、地方独立行政法人の財政状態及び経営状況に関する全ての取引及び事象について、網羅的かつ検証可能な形で作成されなければならない。 地方独立行政法人の財務諸表は、正確な会計帳簿に基づき作成し、相互に整合性を有するものでなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 企業会計は、すべての取引につき、正規の簿記の原則に従って、正確な会計帳簿を作成しなければならない。
資本取引・損益取引区分の原則	<ul style="list-style-type: none"> 地方公営企業は、資本取引と損益取引を明確に区別しなければならない。 地方公営企業においては、その経営成績を適正に示すという観点及び利益又は損失の確定を適切に行うという観点から、その会計において、資本取引と損益取引とを明確に区分しなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 地方独立行政法人の会計においては、資本取引と損益取引とを明確に区別しなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 資本取引と損益取引とを明確に区別し、特に資本剰余金と利益剰余金とを混同してはならない。
明瞭性の原則	<ul style="list-style-type: none"> 地方公営企業は、その事業の財政状態及び経営成績に関する会計事実を決算書その他の会計に関する書類に明瞭に表示しなければならない。 地方公営企業においては、住民の需要に即応した効率的な行政サービスの提供を要するものが求められており、その行政サービスの提供のための負担された経済資源に関する会計情報を負担主体である住民等に対し報告する責任を負っており、住民をはじめとする利害関係者に分かりやすい形で適切に情報開示するため、地方公営企業の会計に関する書類は明瞭に表示されなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 地方独立行政法人の会計は、財務諸表によって、住民その他の利害関係者に対し必要な会計情報を明瞭に表示し、地方独立行政法人の状況に関する判断を誤らせないようにしなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 企業会計は、財務諸表によって、利害関係者に対し必要な会計事実を明瞭に表示し、企業の状況に関する判断を誤らせないようにしなければならない。
継続性の原則	<ul style="list-style-type: none"> 地方公営企業は、その採用する会計処理の基準及び手続を毎事業年度継続して用い、みだりに変更してはならない。 地方公営企業は、その公共的な性格から適切に情報開示を行わなければならない。その会計処理の基準及び手続の選択は原則として排除される。しかし、一つの会計事実について二つ以上の会計処理の基準又は手続の選択適用が認められる場合には、採用した会計処理の基準及び手続については、正当な理由により変更を行う場合を除き、会計に関する書類を作成する各事業年度を通じて継続して適用しなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 地方独立行政法人の会計においては、その処理の原則及び手続を毎事業年度継続して適用し、みだりにこれを変更してはならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 企業会計は、その処理の原則及び手続を毎事業年度継続して適用し、みだりにこれを変更してはならない。
保守主義の原則	<ul style="list-style-type: none"> 地方公営企業は、その事業の財政に不利な影響を及ぼすおそれがある事態に備えて健全な会計処理をしなければならない。 地方公営企業の会計は、過度に保守的な会計処理を行うことにより、地方公営企業の財政状態及び経営成績の真実な報告をゆがめてはならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 地方独立行政法人の会計は、予測される将来の危険に備えて慎重な判断に基づき会計処理を行わなければならない。 地方独立行政法人の会計は、過度に保守的な会計処理を行うことにより、地方独立行政法人の財政状態及び経営状況の真実な報告をゆがめてはならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 企業の財政に不利な影響を及ぼす可能性のある場合には、これに備えて適当に健全な会計処理をしなければならない。
重要性の原則	<ul style="list-style-type: none"> 地方公営企業の会計は、住民をはじめとする利害関係者の地方公営企業の状況に関する判断を誤らせないようにするため、法令の規定に反しない限りにおいて、取引及び事象の金額的側面及び質的側面の両面からの重要性を勘案して、適切な記録、計及及び表示を行わなければならない。 質的側面の考慮においては、地方公営企業の会計の見地からの判断に加え、地方公営企業の公共的な性格に基づき判断も加味して行わなければならない。 重要性の乏しいものについては、法令の規定に反しない限りにおいて、本来の会計処理に由来する範囲で他の簡便な方法によることも、明瞭性の原則に従って認められる。 重要性の乏しいものについては、法令の規定に反しない限りにおいて、会計に関する書類の本来の表示方法によらずに他の簡便な方法によることも、明瞭性の原則に従って認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> 地方独立行政法人の会計は、住民その他の利害関係者の地方独立行政法人の状況に関する判断を誤らせないようにするため、取引及び事象の金額的側面及び質的側面の両面からの重要性を勘案して、適切な記録、計及及び表示を行わなければならない。 質的側面の考慮においては、地方独立行政法人の会計の見地からの判断に加え、地方独立行政法人の公共的な性格に基づき判断も加味して行わなければならない。 重要性の乏しいものについては、本来の簿記の原則に従った処理に由来する範囲で他の簡便な方法によることも、正規の簿記の原則に従った処理として認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> 企業会計は、定められた会計処理の方法に従って正確な計算を行うべきものであるが、企業会計が目的とするところは、企業の財務内容を明らかにし、企業の状況に関する利害関係者の判断を誤らせないようにすることにあるから、重要性の乏しいものについては、本来の厳密な会計処理によらずに他の簡便な方法によることも、正規の簿記の原則に従った処理として認められる。 重要性の原則は、財務諸表の表示に関しても適用される。

※「企業会計原則」においては、このほかに「単一性の原則」(株主総会提出のため、信用目的のため、租税目的のため等種々の目的のために異なる形式の財務諸表を作成する必要がある場合、それらの内容は、信頼しうる会計記録に基づいて作成されたものであって、政策の考慮のために事業の真実な表示をゆがめてはならない。)がある。

5. 財務書類の構成要素

○「中間とりまとめ」における記述

- ・財務書類の体系については、現行のいずれの作成方式においても、貸借対照表で会計年度末における資産と負債のバランスを示すとともに、資金収支計算書で一会計期間における現金等の収入と支出のバランスを示している。その上で、行政コスト計算書と純資産変動計算書のいずれか又は両方の書類によって、一会計期間における発生主義による費用と収益やその他の純資産の変動を示すという役割分担になっている。
- ・地方公共団体の財務業績については、①一会計期間の経常的な費用がどの程度あり、②それが税収等の財源によってどのように賄われ、③固定資産の増減等を含め、将来に引き継ぐ純資産がどのように変動したかを示すことによって評価することが適当であると考ええる。

○課題・論点

- ・構成要素は、資産、負債、純資産、費用、財源でよいか。

○論点整理の考え方

- ・地方公共団体の行財政運営の特性を踏まえ、基本的には現行の取扱いを踏襲するが、「中間とりまとめ」を踏まえ、財源仕訳についてはその意義を踏まえた上で見直すこととしていることから、基準モデルにおいて設定されている「損益外純資産減少原因」及び「損益外純資産増加原因」については、構成要素からは削除する。また、「収益」については、「中間とりまとめ」における財務業績の考え方を踏まえ、「財源」とする。

○基準案

財務業績の構成要素は、それぞれ異なる属性を有する大項目、すなわち、資産、負債、純資産、費用、財源を意味する。

資産

- ・資産とは、過去の事象の結果として、地方公共団体が支配する資源であって、将来の経済的便益またはサービス提供能力が期待されるものをいう。

負債

- ・負債とは、過去の事象から発生した現在の義務であって、その履行が地方公共団体に対して、将来、経済的便益またはサービス提供能力の減少を生じさせるものをいう。

純資産

- ・純資産とは、資産から負債を控除したもので、正味の資産をいう。

費用

- ・費用とは、一会計期間中における活動によって発生した、資産の流出もしくは消費、または負債の発生による経済的便益またはサービス提供能力の減少であって、純資産の減少原因をいう。

財源

- ・財源とは、一会計期間中における活動によってもたらされた、資産の流入もしくは増加、または負債の減少による経済的便益またはサービス提供能力の増加であって、純資産の増加原因をいう。

○留意点

- ・他の検討項目を整理した上で、最終的に整理する。

【総論】財務書類の構成要素に係る参考資料

規定箇所	基準モデル	総務省方式改訂モデル	地方公営企業会計	地方独立行政法人会計	国の公会計	国際公会計基準
新地方公会計制度研究会報告書	総務省方式改訂モデル 財務書類の記載要領(改訂版)	総務省方式改訂モデル	地方公営企業が会計を整理するに当たりよるべき指針	地方独立行政法人会計基準及び地方独立行政法人会計基準注解	一般会計省別財務書類の作成基準	第1号 財務諸表の表示
資産	<p>＜資産＞ 資産とは、過去の事象の結果として、特定の会計主体が支配するものであって、①将来の経済的便益が当該会計主体に流入すると期待される資源、または②当該会計主体の目的に直接もしくは間接的に寄与する潜在的なサービス提供能力を伴うものをいう。</p>	<p>＜資産＞ 資産とは、過去の事象の結果として、地方公共団体が支配する資源であって、以下の項目をいいます。 ・将来の資金流入をもたらすもの ・将来の行政サービス提供能力を有するもの</p>	<p>＜資産＞ 地方公営企業の資産とは、過去の取引又は事象の結果として地方公営企業が支配する資源であって、それにより地方公営企業のサービス提供能力又は将来の経済的便益が期待されるものをいう。</p>	<p>＜資産＞ 地方独立行政法人の資産とは、過去の取引又は事象の結果として地方独立行政法人が支配する資源であって、それにより地方独立行政法人のサービス提供能力又は将来の経済的便益が期待されるものをいう。</p>	<p>＜資産＞ 資産については、現金・預金、有価証券、たな卸資産、貸付金、有形固定資産及び出資金等、過去の取引又は事象の結果として各者行に帰属する一般会計の資源であって、これにより将来の業務提供能力又は経済的便益が期待されるものを計上し、形態を表す科目によって表示する。また、貸借対照表価額については、それぞれの資産の所有目的に応じた評価基準及び評価方法により計上する。</p>	<p>＜資産＞ 資産とは、過去の事象の結果として主体が支配し、かつ、将来の経済的便益又はサービス提供能力が、主体に流入することが期待される資源である。</p>
負債	<p>＜負債＞ 負債とは、過去の事象から発生した、特定の会計主体の現在の義務であって、①これを履行するために経済的便益を伴う資源が当該会計主体から流出し、または②当該会計主体の目的に直接もしくは間接的に寄与する潜在的なサービス提供能力の低下を招くことが予想されるものをいう。</p>	<p>＜負債＞ 負債とは、過去の事象に起因する現在の義務であって、その履行が地方公共団体の提供能力又は経済的便益の減少を生じさせるものを用います。すなわち、資産の財源としてのみた場合、翌年度以降に現金支出等の負担が生じることから、将来世代が負担する部分ということができます。</p>	<p>＜負債＞ 地方公営企業の負債とは、過去の取引又は事象に起因する現在の義務であって、その履行が地方公営企業に経済的便益の減少を生じさせるものを用い、法律上の債務に限定されるものではない。</p>	<p>＜負債＞ 地方独立行政法人の負債とは、過去の取引又は事象に起因する現在の義務であって、その履行が地方独立行政法人に経済的便益の減少を生じさせるものをいう。</p>	<p>＜負債＞ 負債については、未払金、政府短期証券、借入金、公債及び退職給付引当金等、過去の取引又は事象に起因する各者行の一般会計の現在の義務であって、その履行により、将来の業務提供能力又は経済的便益の減少を生じさせるものを計上し、性質を表す科目によって表示する。</p>	<p>＜負債＞ 負債とは、過去の事象から発生した当該主体の現在の債務であり、その決済による経済的便益又はサービス提供能力を有する資源が主体から流出する結果となることが予想されるものである。</p>
純資産	<p>＜純資産＞ 純資産とは、①特定の会計主体の実質的所有者から当該会計主体に対する拠出及び②当該会計主体の活動等によって獲得された剰余金(または欠損)の累積残高をいい、その金額は資産と負債の差額として計算される。</p>	<p>＜純資産＞ 純資産とは、資産から負債を控除したもので、正味の資産をいいます。すなわち、資産の財源としてみた場合、過去及び現役世代が負担した部分ということができます。</p>	<p>＜資本＞ 地方公営企業の資本とは、地方公営企業の業務を確実に実施するために拠出した純資産の基礎及びその業務に関連して発生した剰余金から構成されるものであって、資産の額から負債の額を控除した額に相当するものをいう。</p>	<p>＜純資産＞ 地方独立行政法人の純資産とは、地方独立行政法人の業務を確実に実施するために拠出された純資産の基礎及びその業務に関連して発生した剰余金から構成されるものであって、資産の額から負債の額に相当するものをいう。</p>	<p>＜資産・負債差額＞ 貸借対照表における資産と負債の差額については、「資産・負債差額」の科目で一括計上する。</p>	<p>＜純資産・特分＞ 純資産・特分とは、負債総額を控除した後の主体の資産に對する剰余分である。</p>
費用	<p>＜費用＞ 費用とは、①一会計期間中における活動の成果を生み出すための努力として、②資産の流出もしくは減損、または負債の発生による経済的便益またはサービス提供能力の減少であって、③会計主体の所有者以外との取引その他の事象から生ずる純資産の減少原因をいう。</p>	<p>＜行政コスト＞ 行政コストとは、行政サービス提供に伴って発生する純資産の減少要因をいいます。</p>	<p>＜費用＞ 地方公営企業の費用とは、サービス提供、財貨の引渡又は生産その他の地方公営企業の業務に関連し、その資産の減少又は負債の増加(又は両者の組合せ)をもたらし経済的便益の減少であって、地方公営企業の財産的基礎を減少させる資本取引によってもたらされるものを除くものをいう。</p>	<p>＜費用＞ 地方独立行政法人の費用とは、サービスの提供、財貨の引渡又は生産その他の地方独立行政法人の業務に関連し、その資産の減少又は負債の増加(又は両者の組合せ)をもたらし経済的便益の減少であって、地方独立行政法人の財産的基礎を減少させる資本取引によってもたらされるものを除くものをいう。</p>	<p>＜業務費用＞ 業務費用とは、業務実施に伴い発生する資産・負債差額の減少要因をいう。</p>	<p>＜費用＞ 費用とは、当該報告期間中の資産の流出若しくは消費又は負債の発生による経済的便益又はサービス提供能力の減少であって、所有者への分配に関連するもの以外の所有分の減少を生じさせるものである。</p>
財源	<p>＜収益＞ 収益とは、①一会計期間中における活動の成果として、②資産の流入もしくは増加、または負債の減少の形による経済的便益またはサービス提供能力の増加であって、③会計主体の所有者以外との取引その他の事象から生ずる純資産の増加原因をいう。</p>	<p>＜収益＞ 収益とは、行政サービス提供に対する対価として獲得される純資産の増加要因をいいます。</p>	<p>＜収益＞ 地方公営企業の収益とは、サービス提供、財貨の引渡又は生産その他の地方公営企業の業務に関連し、その資産の増加又は負債の減少(又は両者の組合せ)をもたらし経済的便益の増加であって、地方公営企業の財産的基礎を増加させる資本取引によってもたらされるものを除くものをいう。</p>	<p>＜収益＞ 地方独立行政法人の収益とは、サービスの提供、財貨の引渡又は生産その他の地方独立行政法人の業務に関連し、その資産の増加又は負債の減少(又は両者の組合せ)をもたらし経済的便益の増加であって、地方独立行政法人の財産的基礎を増加させる資本取引によってもたらされるものを除くものをいう。</p>	<p>＜財源＞ 歳入の徴収決定済額(当該年度に調査決定を履行したものに限る。)に、資産・負債差額の増減項目とはならない資産の処分による収入及び貸付金回収収入等を加減した額を計上する。</p>	<p>＜収益＞ 収益とは、所有者からの拠出に関連するもの以外で、純資産・特分の増加をもたらす一定期間中の主体の通常の事業過程で生ずる経済的便益又はサービス提供能力の総流入である。</p>

※上記は「規定箇所」を引用しているが、「国の公会計」の「費用(業務費用)」については、「一般会計省別財務書類の作成基準」等をもとに、その考え方を記載。

※「基準モデル」においては、このほかに「増益外純資産減少原因」及び「損益外純資産増加原因」がある。
 ・「増益外純資産減少原因」：損益外純資産減少原因とは、①当該会計期間中における資産の流出もしくは減損、または負債の発生による経済的便益またはサービス提供能力の減少(またはその内部構成)の減少原因をいう。損益外純資産減少原因は、その発生形態の別によって、「財源の使途」、「資産形成充当財源の減少」及び「その他の純資産の減少」に細分類される。
 ・「損益外純資産増加原因」：損益外純資産増加原因とは、①当該会計期間中における資産の流入もしくは増価、または負債の減少の形による経済的便益またはサービス提供能力の増加(またはその内部構成)の増加原因をいう。損益外純資産増加原因は、その発生形態の別によって、「財源の調達」、「資産形成充当財源の増加」及び「その他の純資産の増加」に細分類される。

6. 財務書類の作成単位

○「中間とりまとめ」における記述

- ・特になし。

○課題・論点

- ・現行どおり普通会計ベースとするのか、地方公共団体の財政の健全化に関する法律において用いている一般会計等ベースとするのか。

○論点整理の考え方

- ・全団体の比較可能性を確保する観点からは、普通会計ベースもしくは一般会計等ベースのいずれかにするのが適当である。（設置される会計ごとの作成とすると、特別会計等の設置状況は団体によって異なるため、比較可能性を担保できない。）
- ・地方公共団体の財政の健全化に関する法律との関係、実務面での負担を考慮すれば、一般会計等ベースとするのが適当か。
- ・一方、決算統計データとの関連や継続性を踏まえると、普通会計ベースとすべきとの考えもある。
- ・なお、現行の取扱いを踏まえ、公営事業会計を加えた地方公共団体の全体財務書類及び全体財務書類に地方公共団体の関連団体を加えた連結財務書類をあわせて作成することが適当か。

○基準案

- ・全体及び個別団体における影響等を精査の上、引き続き検討。

○留意点

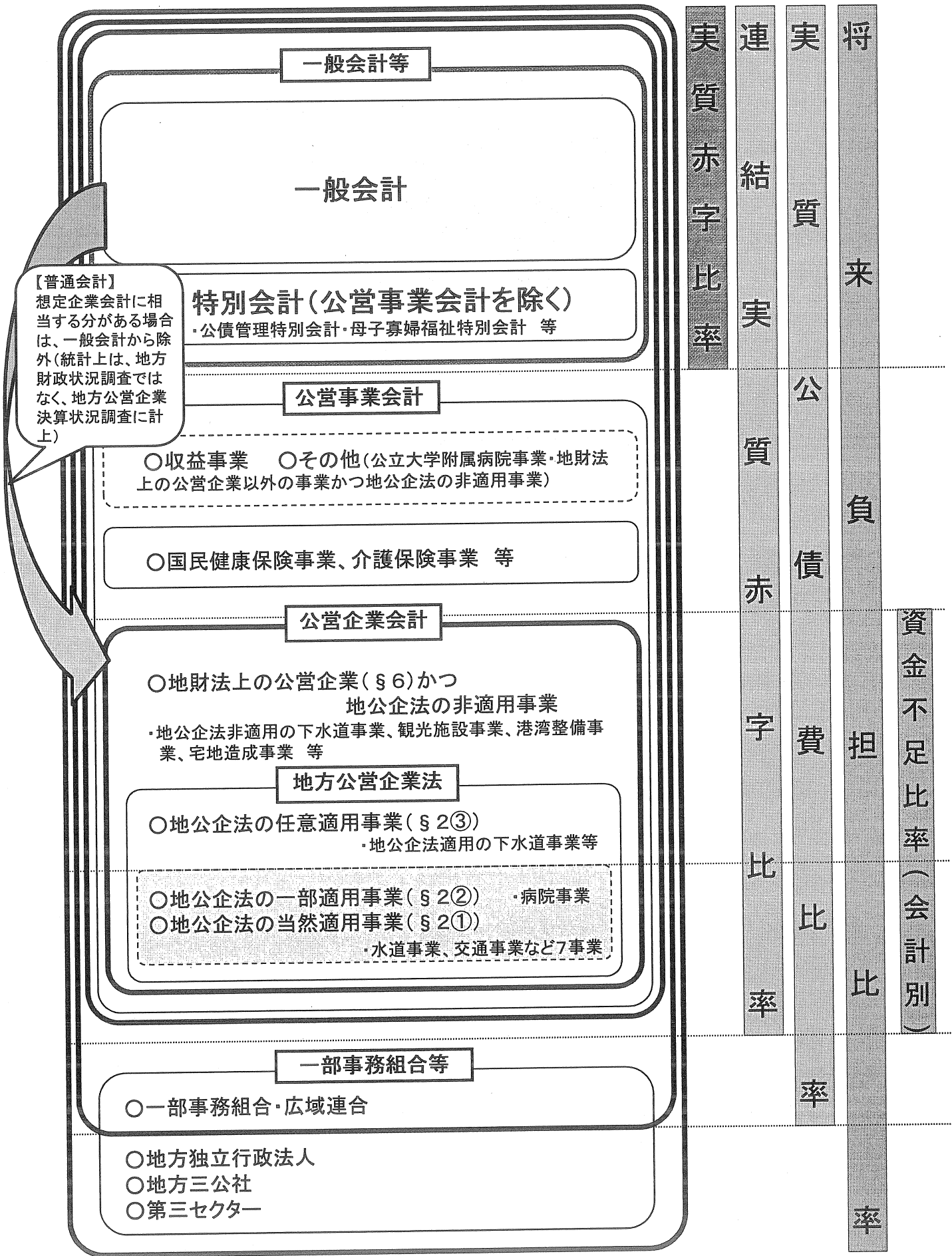
- ・他の検討項目を整理した上で、最終的に整理する。

【総論】財務書類の作成単位に係る参考資料

	普通会計	一般会計等
対象会計	<ul style="list-style-type: none"> ・公営事業会計以外の会計(※) (公営事業会計とは、公営企業会計(法適用企業及び法非適用企業)、収益事業会計、国民健康保険事業会計、後期高齢者医療事業会計、介護保険事業会計、農業共済事業会計、交通災害共済事業会計をいう。) ※一般会計の中で、公営事業会計に係る全部又は一部の収支(新たに建設中のものを含む。)を経理している場合(以下「想定企業会計」という)においては、これに係る一切の収支は普通会計から分別して、公営事業会計中の該当会計において経理されたものとして取り扱う 	<ul style="list-style-type: none"> ・一般会計 ・特別会計のうち以下に掲げるもの以外のもの (地方公営企業法第2条の規定により同法の規定の全部又は一部を適用する企業(法適用企業)に係る特別会計、地方財政法第6条に規定する政令で定める公営企業のうち法適用企業以外のもの(法非適用企業)に係る特別会計、国民健康保険事業・介護保険事業・後期高齢者医療事業・農業共済事業に係る特別会計、老人保健医療事業・介護サービス事業・駐車場事業・交通災害共済事業・公営競技に関する事業・公立の大学又は公立の大学の医学部若しくは歯学部附属する病院に関する事業・有料道路事業に係る特別会計)
用いている制度等	<ul style="list-style-type: none"> ・地方財政状況調査(以下「決算統計」という) ・地方財政法第30条の2の規定に基づく地方財政の状況の国会報告 	<ul style="list-style-type: none"> ・地方公共団体の財政の健全化に関する法律(以下「財政健全化法」という)
用いている趣旨	<ul style="list-style-type: none"> ・地方公共団体の会計には、一般会計のほかにも多くの特別会計があり、これらの会計は各団体とも同一の基準で区分されていないため ・一般会計で処理しているもののうち、公営企業会計に性質の近いもの(想定企業会計分)は、地方公営企業決算状況調査において捕捉することとして除いている 	<ul style="list-style-type: none"> ・財政健全化法に基づき財政指標を制度化するにあたり、客観性を担保する観点から、現実に法的に明示されている会計単位を基礎として算定することとしたため
メリット	<ul style="list-style-type: none"> ・財務書類の作成団体の8割が使用している総務省方式改訂モデルと同一の対象範囲とすることができる(過年度分との一定の比較可能性がある) ・決算統計データとの関連付けが容易になる 	<ul style="list-style-type: none"> ・現行の法令に基づいた体系であるため、財政健全化法に基づく財政指標と整合的である ・実務的な観点から、算定がしやすい ・各地方公共団体の決算書との関連付けが容易になる
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ・想定企業会計に相当する分がある場合は、その会計分を除外する必要があるため、会計単位での算出ができなくなるとともに、容易に算定が可能か検証する必要がある ・財政健全化法に基づく財政指標との対象範囲が不整合となる 	<ul style="list-style-type: none"> ・実質収支等の統計値として幅広く利用されている普通会計と相違するため、決算統計データと連動した活用ができない

【総論】財務書類の作成単位に係る参考資料
 普通会計と一般会計等の対象会計範囲のイメージ

地方公共団体財政健全化法



7. 財務書類の作成基準日

○「中間とりまとめ」における記述

- ・現行の現金主義会計による予算・決算制度を前提とした上で、財務報告におけるあるべき基準のあり方等について議論を進めてきた。

○課題・論点

- ・現行どおり、3月31日を基準とし、出納整理期間を含めたものとするかどうか。

○論点整理の考え方

- ・財務書類は、現行の予算・決算制度を補完する位置付けで作成することから、現金主義ベースと整合的である必要があること
 - ・地方公共団体の会計実務においては、国庫補助金の受入や地方債の借入など、出納整理期間中に取引のあるものの占める割合がかなり大きいこと
 - ・財政運営上は、出納整理期間を除いた期末の財務状況を見ることの必要性が薄いこと
- 以上の考えから、作成基準日は会計年度末(3月31日)とし、出納整理期間中の現金の受払い等を終了した後の計数をもって会計年度末の計数とする。

○基準案

- ・作成基準日は、会計年度末(3月31日)とし、出納整理期間中の現金の受払い等を終了した後の計数をもって会計年度末の計数とする。

○留意点

- ・他の検討項目を整理した上で、最終的に整理する。

【総論】財務書類の作成基準日に係る参考資料

出納整理期間を除く要約財務諸表 【各会計合算】

平成24年度 大阪府財務諸表より

貸借対照表

(単位:百万円)

区 分	平成24年度 (出納整理期間を含む) ①	出納整理期間中の取引 (増加) ②	出納整理期間中の取引 (減少) ③	平成24年度 (出納整理期間を除く) ①-②+③
資産の部				
流動資産	522,105	148,948	272,642	645,799
現金預金	70,407	57,258	215,170	228,319
未収金	49,687	91,614	57,258	15,331
基金	336,091	76	214	336,229
その他	65,920	-	-	65,920
固定資産	7,945,252	27,043	36,012	7,954,221
事業用資産	2,250,795	-	-	2,250,795
インフラ資産	4,280,078	-	-	4,280,078
建設仮勘定	203,629	-	-	203,629
投資その他の資産	1,190,943	27,043	36,012	1,199,912
基金	314,837	25,239	36,012	325,610
その他	19,807	-	-	19,807
資産の部合計	8,467,357	175,991	308,654	8,600,020
負債の部				
流動負債	882,251	27,119	215,170	1,070,302
地方債	806,774	-	-	806,774
未払金	-	27,119	215,170	188,051
その他	75,477	-	-	75,477
固定負債	6,013,988	55,388	-	5,958,600
地方債	5,330,116	55,388	-	5,274,728
その他	683,871	-	-	683,871
負債の部合計	6,896,239	82,507	215,170	7,028,902
純資産の部合計	1,571,118	93,484	93,484	1,571,118

行政コスト計算書

(単位:百万円)

区 分	平成24年度 (出納整理期間を含む) ①	出納整理期間中の取引 (増加) ②	出納整理期間中の取引 (減少) ③	平成24年度 (出納整理期間を除く) ①-②+③
行政収入	2,216,398	-	-	2,216,398
地方税	1,238,401	-	-	1,238,401
地方交付税	284,441	-	-	284,441
分担金及び負担金	20,940	-	-	20,940
使用料及び手数料	64,195	-	-	64,195
国庫支出金	205,706	-	-	205,706
その他	402,715	-	-	402,715
行政費用	2,221,998	-	-	2,221,998
給与関係費	683,119	-	-	683,119
物件費	89,974	-	-	89,974
負担金、補助金、交付金等	598,186	-	-	598,186
維持補修費	39,318	-	-	39,318
繰出金	376,335	-	-	376,335
減価償却費	156,667	-	-	156,667
引当金繰入額	109,454	-	-	109,454
その他	168,945	-	-	168,945
金融収入	731	-	-	731
受取利息及び配当金	731	-	-	731
金融費用	80,721	-	-	80,721
地方債利息・手数料	80,475	-	-	80,475
その他	245	-	-	245
通常収支差額	▲ 85,590	-	-	▲ 85,590
特別収入	167,677	-	-	167,677
特別費用	80,663	-	-	80,663
特別収支差額	87,014	-	-	87,014
当期収支差額	1,424	-	-	1,424

キャッシュ・フロー計算書

(単位:百万円) (参考)

区 分	平成24年度 (出納整理期間を含む) ①	前年度出納整理 期間中の取引 ②	当年度出納整理 期間中の取引 ③	平成24年4月1日～ 平成25年3月31日 のキャッシュ・フロー ①+②-③	平成24年度 (出納整理期間を除く) ①-③
行政サービス活動収入	2,010,363	52,732	▲ 83,625	2,146,720	2,093,988
地方税	1,236,477	49,475	81,773	1,204,179	1,154,704
地方交付税	284,441	0	1,042	283,399	283,399
国庫支出金	205,706	67,496	57,801	215,401	147,905
その他	283,739	▲ 64,239	▲ 224,241	443,741	507,980
行政サービス活動支出	2,091,481	255,112	156,046	2,190,547	1,935,435
行政サービス活動収支差額	▲ 81,118	▲ 202,380	▲ 239,671	▲ 43,827	158,553
投資活動収入	618,512	69,397	88,495	599,414	530,017
国庫支出金	54,962	30,976	50,868	35,070	4,094
基金繰入金(取崩)	66,567	38,187	36,226	68,528	30,341
その他	496,983	234	1,401	495,816	495,582
投資活動支出	658,739	38,317	54,721	642,334	604,018
公共施設等整備支出	120,345	30,081	27,764	122,662	92,581
基金積立金	47,103	6,735	25,166	28,672	21,936
その他	491,291	1,500	1,791	491,001	489,500
投資活動収支差額	▲ 40,227	31,081	33,774	▲ 42,920	▲ 74,001
財務活動収入	772,352	58,293	52,388	778,257	719,964
地方債	668,218	58,293	55,388	671,123	612,830
その他	104,134	0	▲ 3,000	107,134	107,134
財務活動支出	636,194	7,087	4,403	638,877	631,790
地方債償還金	454,604	7,176	4,659	457,120	449,945
その他	181,590	▲ 89	▲ 256	181,756	181,846
財務活動収支差額	136,159	51,206	47,985	139,380	88,174
収支差額合計	14,814	▲ 120,093	▲ 157,912	52,633	172,726
前年度からの繰越金	18,339	0	0	18,339	18,339
形式収支	33,153	▲ 120,093	▲ 157,912	70,972	191,065
歳入歳出外現金受入額	322,239	0	0	322,239	322,239
歳入歳出外現金払出額	▲ 284,986	0	0	▲ 284,986	▲ 284,986
再計	70,407	▲ 120,093	▲ 157,912	108,225	228,318

8. 財務書類の表示単位（金額）

○「中間とりまとめ」における記述

- ・特になし。

○課題・論点

- ①地方公共団体の財政規模によらず、統一した表示単位とするか。
- ②表示単位未満の取扱いはどうするか。

○論点整理の考え方

- ①現行や国の取扱いも踏まえ、原則として百万円単位での表示とするが、地方公共団体の財政規模に応じて千円単位とすることも可能とする。
- ②表示単位未満は四捨五入とし、合計金額に齟齬が生じる場合は注記する。また、単位未満の計数がある場合は「0」を表示する。

○基準案

- ・財務書類の表示金額単位は、百万円を原則とする。ただし、地方公共団体の財政規模に応じて千円単位とすることもできる。また、同単位未満は四捨五入するものとし、かかる四捨五入により合計金額に齟齬が生じる場合、これを注記する。なお、単位未満の計数があるときは「0」を表示する。

○留意点

- ・他の検討項目を整理した上で、最終的に整理する。